

## 「女郎」の語のニュアンス

伊勢のお玉が寛文のころよほど嬌名をさせた女であつたことは嬉遊笑覧にのべるところをもつてして知られる。音曲にすぐれてゐたらしいが、もとより、また遊女であつたこともあきらかであらう。たゞ、遊女としてどのやうなくらゐに属すべきものであつたかは知らない。しかし、風俗史のことは、当面の問題ではない。要するに、「女郎考」において、わたくしは浮世草子にみえるよりさかのぼるところの、そして、浮世子草にその花形として登場する女郎につながるべきところのこの語の徴証として、「お玉女郎」の例を挙げたのである。このお玉について管見に入つた例で《女郎》の語のニュアンスを知ることがよりとなるかとおもはれる例が、栢雨軒一孔撰「投盃」（延宝八年刊）の「第三」にみえる。すなはち、

八重葎こちもちぶんの恋をする

玉さまをみて世をかこつ虫

抜參物思ふ月我からと

ここで、もし、さきに「女郎考」であげた玉海集および毛吹草の例「お玉女郎」とこゝにあげる「玉さま」とをつきあはせてみるならば、「お玉女郎」といつたばあひの「女郎」は、こんにちの

「何某先生」といふばあひの「先生」と、形態論的におなじつきかたをすることはであつたとみとめられる。そして、かういふ風に人名の下につけていふばあひ、それは、意味の方でもある点先生とくらべうべき一種の敬称としてつかはれたものではなかつたかといふことが考へられる。すなはち、いま、直観的なかたちで類推にうつたへて《女郎》の語の意味のニュアンスを想像してみるならば、《けいせい》は《教師》の方に対応し、《女郎》が《先生》の方に対応する関係で、女郎はけいせいをあらはすことばであつたものと考へうるであらう。もつと精確ないひかたをすれば、さういふふうなことばであつた段階ないしは時期を《女郎》は経過したことであらう。ただし、もとより、全体としていへば、これとて、おほづかみなかたちではなしである。また、このやうな意味のニュアンスのうすれてゆく過程までもこゝに歴史的に追つてみることはしない。

しかしながら、もう一言だけしておかう。貴族としての上臈の女もジョローとよばれ、けいせいとしての女郎もジョローとよばれた時期がとにかくもしばらくはあつたことをおもひだすならば、ジョローといふかたちは、あるくだけたしたしみをおびたかたちとしてさかんにもちゐられた俗語のかたちであらう。(もし、先生にも「センセイ(センセー)」のかたちのほか、「センセ」といふ形がひろく一般にもちゐられてゐると、比較はいつそうなめらかなものとなるのだが)。そして、くるわの世界に関して、この語(すなはち「女郎」)によつて言及される対象がけいせいであることはいふまでもなくとも、語そのものの知的な意味は、上臈

(貴族としての)であつたのである。(代議士やばくちうちの親分をもセンセーとよぶばあひの先生をも、考へあはせてみられよ)。いささか文学的な表現をもつてすれば、そこに、くるわの幻想があつたものでもあらう。このやうに、半社会——*demi-monde*——を貴族社会に転移して文脈をくみだてるどころの心理においては、*嫖客をダイジン* (「大尺」と書く)とよぶことも自然である。いま、こゝに、大尺の語の考証はこゝろみないが、しかし、もし、女郎の語があつて大尺の語がうまれたとすれば、つまり、《女郎》は、大尺の語を生むところの語でもまたあつたのだといひうる。とにかく、女郎と大尺とが一つ文脈に出てくることばであつて、その心理的背景には上臈と大臣との幻想が、——これを町人の意識の問題としてなんと解釈すべきであるにせよ——、ひろがつてゐるとするならば、女郎の語がやつてやどしてゐたであらうニュアンスのそのおよそのところは、こゝからもまた想像しうるやうにおもふ。

(亀井)